

うたそら

第8号

2022
May

5

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄「新」	18
一首評「そらよみ」	22
短歌リレーコラム「望遠鏡」	24
リレーエッセイ「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27

うたそら 第8号

発行：2022.05.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

次号予告 うたそら 第9号

連作欄 8首の連作 自由詠
 テーマ詠欄 「色」
 一首評「そらよみ」
 短歌リレーコラム「望遠鏡」
 リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

第9号 22 6/30(木) 24時
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「色」1首

第10号 22 8/31(水) 24時
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「涼」1首



編集後記

夏のように暑かったり、はたまたひやっと寒い日が続いたり、気候の安定しない今日このごろですが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。体調など崩されていませんか。

このたびは、短歌誌「うたそら」第8号へのご寄稿をいただきまして、ありがとうございます。ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第8号の参加歌人さまは79名、連作欄には59名、テーマ詠には62名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「新」。新生活や新しいアイテム、新しい朝など、さまざまな「新」の短歌が集まりました。

一首評「そらよみ」は第7回となりました。歌を投稿するだけではなく、読んで感想を伝える／もらうことで、得られる気づきや喜びもあるのではと思います。また、「短歌は作らないけど読むのが好き」という方の、「そらよみ」コーナーだけのご参加も大歓迎です。ぜひ次回もたくさんのご寄稿をお待ちしております。

短歌なリレーコラム「望遠鏡」は西村曜さん、リレーエッセイ「いちごいちえ」は竹村ヒカルさんが書いてくださいました。ありがとうございます！

今号も皆さまのおかげで読み応えのある「うたそら」をお届けすることができました。どうぞごゆっくりお楽しみください。

「うたそら」では Twitter での呟きもお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号は6月末×切の7月初旬発行、テーマ詠のお題は「色」です。夏が始まり、さまざまなものが色鮮やかに輝き始める時期ですね。色とりどりのすてきな作品をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ



うたそら 第8号

ご参加
 いただいた
 みなさん (五十音順)

青藤木葉	@konoha_ao	江口美由紀	@miyuki_eguchi	白石夜花	@ohana_no_sekai	御糸ち	@MEATsachi
あき子	@ponko_san	大坪命樹	@OotsuboMeiju	鈴木ベルキ	@pandakirinkaba	衣木	@mimi_4567
麻倉ゆえ	@AsakuraYue	岡田 濫	@kakomiyano	たえなかず	@suzusuzu2009	虫武一俊	@mushitake
阿部蓮南	@renat815	音平まご	@nandemonaihi16	多香子		六浦筆の助	@Tohakunutun5057
天野うずめ	@uzume_no_hijiri	がね	@amicus08	高橋良	@atahashi_ry5	六殿めれう	@mereumumai
雨虎俊寛	@amefurashi3107	かうすまゐ	@inari_kasuma	田中翠香	@suikakimenbi	村田一広	@mucc12022
有村桔梗	@chatteinoire_k	河岸景都	@kareido1111	千原こはぎ	@kohagi_tw	杜野詩季	@4kitanka55
歩歩	@subperf	菊池洋勝	@kate_kawagishi	月硝子	@geshodo	矢野目知桂	
五十子尚夏		君村類	@kmmr_r09	ともえ夕夏	@croissant_hey_z	ユーリ	@urisuke33
池田竜男		久助	@nTbBm64sh1lap	西淳子	@nakam8	ゆやゆ	
石川順一	@Hiter57	響音	@tkuro2016	ネコノカナエ	@nekonokanae_uta	ゆりこ	@b7282e_akaneiro
宇祖田都子	@Shimsyutu2020	くろだたけし	@kuro2016	薄荷。	@aiohimeco	うま	@lama_miyashita
泳二	@Ejshimada	古都 梨衣子	@_yu_ca_li_	葉村直	@nao_hamura	龍翔	@oppizuntsuan
hs	@hswelt	ここのはも。	@Puusen0623	早月くう	@k_hayatsuki	れいあむ	@Re_1_4m
		咲兵衛	@zumiTakeishi	雛河麦	@may_spica_358	Redvelvetake	@R_velvet_Cake
		佐藤水魚	@satohio_tanka	ひづる寿司マイン	@HtsbNR4w1wj8M	waka_no	@CathyT01207758
		三月三日	@sangatsu_mikka	廣珍堂	@hirochin_dos	和田晴美	@hrm143ponta
		汐射ハルカ	@haru_c17h17c12n	飛和	@hiwa_towa		
		塩谷風月	@sfugetsu	福山桃歌	@peachsong_521		
		紫苑	@purple_aster	細川エリカ	@luvluvkasen		
		嶋田さくじ	@sakakoko304	ほのかわり	@Honofuwari		
		西鎮	@xi_zhen_jvUT	真岡まな	@mao_or_mana		
		雀来豆	@jacksbeans2	まゆけ	@mskpompomfuwa23		

計79名

たくさんのお参加
 ありがとうございます！

流星雨

雨虎俊寛

東へと速度を上げるちぎれ雲 季節外れの気圧配置に
この部屋の確かなものはきみだけで無視界飛行のなかで抱きあう
雨雲に太陽さがす向日葵とおなじうなじをきみはしていて
すこしだけ開く窓からしぶき雨かまわずきみはくびすじそらす
いく筋も窓うちつける流星雨 破裂しそうな鼓動かき消す
流星とおなじだきみが言いかけて逃がしたままの言葉のつづき
約束をいつからだろうねだらないきみが見つめるドシャ降りの雨
僕でなくてもよかった夜のロール紙の上に置かれたドライフラワー

あづさゆみ

有村桔梗

いつしらに取り残されて春の夜ちひさくなつたラミーをかじる
あづさゆみ『春原さんのうた』を観るちひさき映画館のかたすみ
つぎつぎに花は咲きだし類想の春にさまよわたくしである
ひとりぶんのさみしさが夜に濡れながら佇んでゐる春の公園
黒猫に起こされてゐる春末明 夢に見てゐたひとを忘れて
美濃焼にひと枝挿したゆきやなぎ夢のみぎはをあふるるやうに
たましひが飛び立つたつてわかるから白木蓮のはなは、笑つて
あふむけのひとばかりゐてはなびらは春の涙のやうにはららぐ

花冷え狂詩曲

ラフソディ

五十子尚夏

花冷えという語彙などを沈むれば爛れゆく臓器わが裡にあり
沈丁花のはつかに香る裏路地に手裏剣を投げつけられている
花降れば花のあわいに惑いたる心地して一度のみ竹刀振る
両の手にますかけ線のあることの愛しき今宵の枝垂桜よ
花曇りの洗面台に名も知らぬ化粧道具のしずもりてある
アネモネとその名を声にするときの少女にしては大人びている
世界から取り残されてゆきそうなSURVIVE花や詩をすり抜けて
花疲れこの世を統べる神のごと地球儀に手のひらを翳しつ

夢八夜

池田竜男

弓であることを忘れて耳であるたくさんの弓電車に揺れて
この車両だれも携帯見てなくてひとに見られて赤らむ車両
船上のカフカの咳がおさまって静かに揺れるカフカとボート
口ついた「フアイト」は部屋に留まって夜帰宅して「フアイト」歌う子
ゴダールの恋人は夜ゴダールの寝顔見ている メガネ外れた
閉じたならもう開かない朝顔は開かないよう傘は雨堰く
足あとはいつも無名できみの靴きみいなくてもきみを呼ぶのに
肛門にトイレットペーパーはさまって 兄さんさよなら さよなら弟

はならないんじゃないだろうか……。

佐藤 そうだね……。

西村 じゃあ、わたしはこの歌は、一番くじを四
回引くことから想起される言葉が「ためらい傷」
なんだよ、という歌なんですよ。

佐藤 だとしたら、やっぱり歌の順番が逆だよ。

西村 「一番くじを四回引いて」「ためらい傷」
ということば」が過ぎつたと、上句と下句を逆
にする？ でもわかるんじゃない？ それは最
初の歌のかたちでも。

佐藤 わかるんだけども……。

西村 一番くじを四回引くシチュエーションつ
て、けっきょくいいのが出なかったから、あと
一回、あと一回つて引くかんじだとおもうん
だけれど、それを「ためらい傷」みたいな傷をど
んどんつけていくこととリンクさせたかったん
だけ。

佐藤 リンクはできる。

西村 それは上句と下句を入れ替えたところで
変わらなくない？

佐藤 いや、僕は元歌の上句が重いというか、
前に唐突感があつて、下句はその答え合わせ、つ
てほどもないけど、リンクしていることもわか
るんだけど、実際に起こったことの順序として
は逆じゃないですか。だから種明かしとしては
ちよつと種と仕掛けの関係が弱いし、「ためらい
傷」がはじめにあると唐突すぎるのもあるから、
上句と下句を逆にしたほうがいいとおもう。

西村 では佐藤さんの歌に移ります。

紫のインクの蹟が百年の年を經り來てまとい
ゆく呪詛 / 佐藤博之「心の花」二〇二三年三月号

西村 夫婦なのでわかってしまうのかもしれない
ですが、これは東京駅前のインターメディア
テクに行ったときに見た展示物でしょう？

佐藤 そうです。

西村 そういうのわかつちやうのあれだよね
……。でも夫婦の歌会だから仕方ない。歌の意
味としては「インクの蹟」が年月の経つたときに、
呪い、呪詛のようになっていくんだ、という。物
が百年経つたら妖怪になる、みたいな。「紫」と
いうのがいいとおもいました。高貴な色でもある
けれど、普段使いの色ではないような色だから
真実味がある。でも「インクの蹟」なんですよね、
「インクの蹟」ってどういうこと？ インクで書
かれた字じゃなくて、染みみたいなこと？

佐藤 まあどちらでも。

西村 どちらでもか。あと「經り來て」「まとい
ゆく」と続いているところがちよつと苦しいとお
もいました。「經り來て」を使うなら「まといゆく」
の「ゆく」はいらないし、「まといゆく」を使
いたいなら「經り來て」の「來て」を何とかする、
というのはできるとおもいます。では、自歌自
註をどうぞ。

佐藤 はい。百年経つて、しかも文章つてこと

で……

西村 文章なの、やつぱり。

佐藤 インク染みだし、絵ではないよね。

西村 わたしもこれは絵ではないとおもった。
インクつて言われたらペンとインクをおもった。
なんか文章だよ、文書だよ。

佐藤 うん。だから文字にせよ文字でないにせ
よ文章を含めた紙であるところで、それが百年
前の学説つてことになる、それに囚われちゃつ
てる部分もあるのか、と。それが文章に書かれ
るなかで意図していないもの、活字として残つ
ているんだけど大元は意図していないような
もの、染みなんかも含めるし文字もなんだけれど、
それが百年も経つてくると神格化しちゃつて、あ
の先生の書いたものだから……つてなるのはあ
る意味で呪詛なんじゃないかなあ、つて。

西村 うーん、そこは読み取れませんでした。付
喪神的なことしか取れなかった。

佐藤 付喪神的な歌としてもいいんだけども。
佐藤 付喪神的な歌としてもいいんだけども。
佐藤 付喪神的な歌としてもいいんだけども。
佐藤 付喪神的な歌としてもいいんだけども。

西村 ……はい、ということで、ふたり歌会を
終了します。ありがとうございます。

佐藤 ありがとうございます。

追記：感想として、佐藤さんは「歌会にはやつぱ
り三人はほしいね……」と言っていました。わ
たしも、歌会の最少人数はやっぱり三人だとお
もいます。

望遠鏡 8



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手

西村曜

テーマ 「ふたり歌会」 歌会記

二〇二二年四月十四日（木）に、家の居間に夫である佐藤博之と「ふたり歌会」を開催しました。コロナ禍のなか対面の歌会を久しくやっていないので、歌会の最少人数とおもわれるふたりの対面歌会が夫婦でならでできるのでは、とおもつての試みです。

西村 はい、ではふたり歌会をはじめます。よろしくお願いします。歌は自由詠、既発表歌可です。

ふと過ぎる「ためらい傷」ということば一番くじを四回引いて

／西村曜「七月の短歌日記より」「うたそら」第4号

佐藤 まずこの歌のポイントとしては「ためらい傷」という言葉と「一番くじ」という言葉。この

二つの取り合わせが歌のポイントかとおもいます。「ためらい傷」ということで、ざっくりと思

い切りよくはいかなくて、中途半端に切った傷なのですけれど、それが「一番くじ」を四回引く、

何度も何度も引いて、でも自分で満足できる結果が得られなかった、と。けっきょくこの「一番く

じ」は当たらなかったんだな、とおもいました。それが「ためらい傷」のように、自分のなかですつ

きりしないことが四回続いた点が、この歌のポイントだとおもいます。ちよつと気になることとし

て、感覚ではその「ためらい傷」が「一番くじ」と取り合わせとしてあるとき、数詞が出てくると

わかるなという気がします。けれど初句の「ふと過ぎる」があまり効いていないとおもわれました。

「ことば」でいいのか、もうちよつと見えたほうがいい気もしました。歌なのでけっきょくそこは

ほんとうに傷がついていなかったにしろ、何かは傷ついていて、それを書いたほうが痛さなりリア

リティなりが伝わってくるとおもいました。西村 これ、リアルについてる傷じゃなくない？

佐藤 リアルには傷ついていないとおもう。西村 うん。で、「ふと過ぎる」がよくないって

言ってるの？ 佐藤 そこはよくない。西村 それはわたしもちよつとおもってました。

「ふと」、短歌でよく使っちゃうんだけど、何かの

歌会で「ふと」はあんまりよくないって言われた。

佐藤 どちらかといったら言葉を削るとき削れるもののひとつだとおもう。だいたい短歌って

いうのは、ふとおもう、ふと何かすることが詠まれるから「ふと」はほほいらない。

西村 それで、さっきの「傷」がリアルにどうこうっていうのがちよつとよくわからなかった。

佐藤 ことばが過ぎるだけだと、なぜ過ぎたのかという言葉もなく、作者としての接点が浅

い。だから「ふと過ぎる」だけじゃなくて「ためらい傷」という言葉がまじまじと浮かんでくる

ようなシチュエーションがいるとおもう。「ふと過ぎる」だと、あまりにもただ頭のなかで勝手に過ぎた、というかんじがするから、実際に傷

つかないまでももうちよつと何か「ためらい傷」を手触りをもつて感じられるところがほしい。

西村 「一番くじ」を四回引いたことそのものが「ためらい傷」とは考えられないかんじ？

佐藤 考えられるけど……。一番くじを四回引いたという体験だけの歌なのか「ためらい傷」がつくことの歌なのか。「ためらい傷」が強めの言葉だからもうちよつと「ためらい傷」が重くて

いい気がする。西村 歌のなかでの比重が、ってこと？

佐藤 うん。と、おもう。西村 ……はい、では佐藤さんの批評が終わり

ました。この歌会、自歌自註のコーナーを設けないと、ひとりお話会になってしまつて歌会に

日常生活

石川順一

ふたつのものについて

泳二

「北風のうしろの国」の完全版うちに有るのはダイジェストである

鴨は居なくなりけり草餅の白粉を気にせず食べて居る我

キリンラガービールの缶を捨てられずベビーカーに鉄分が有る

三枚の板を運べば店内でビール飲み出す男を見たり

チューハイの缶が斜めを向いて居る段ボール箱は正常なのに

ポップコーン弾けて居ない玉多くカフェオレコーヒー復活したり

図書棚の高さが足りぬ浩瀚な書物を読んで行かねば眠る

清隆と武揚の友情惚れますな内閣制度は様変わりして

屋上猿部 VIII

宇祖田都子

息ができない

江口美由紀

簡単にいいよって言うジャムパンが売り切れていた理由も聞かず

先輩の顎がコトリと載っている膝のお皿でスूपを啜る

屋上に呪文のごとく響く名よ五月の夕の同報無線

屋上にヒビは鋭く深くあり階下に闇の雫を落とす

屋上に打ち捨てられたオルガンのふいごの音にそっくりだった

屋上を出るときみんなごめんねとつぶやいている五月の夕べ

青葉風タウンページをバラバラと鳩に読ませるポツポツポボ

もう何も受信していないアンテナが私を含め三本もある

その怒りはとうめいでわたしそのものになり朝焼けの街へ出てゆく

平凡な労働をして平凡なお金をもらったりしているうちに

鑑賞用の梅、果実用の梅があり残らず味わいつくして帰る

雪柳には雪柳の凝りがあり夕闇のなか伸びをしている

春の雲の求愛のそのあとさを駅ホームのベンチにひとり

街灯はくじらのかたち日暮れには腹がまあるく灯るのだろう

桜とりわけ今まさに咲きだしそうな桜の下は息ができない

ずっと二人で留守番をしているような令和二年令和三年そして

ウクライナ侵攻に泣く

大坪命樹

刀よりしたたかなれる文筆の未だ知らされどなほ書かんとぞ
いかなる世ぞ大量無差別殺人鬼を大統領と呼ぶは 仏よ救世を
プーチンよ救はれんとぞ僅かにも思はば南無阿弥陀仏唱へよ
プーチンとて生身の人なり 世界挙げ戦争放棄の楚歌ぞうたはん
ウクライナが爆炎と血に痛むべし かの傷痕にわが死を重ねよ
とほき国虐げらるる人のをり 彼らが春をなんぞ奪へる
虚言吐き残虐兵器ぞ使ひぬる 救ふ神やはたれかおはする
歴史書にプーチンファシズム記さるべし 核終焉アルマゲドンの来たらざらば

ガラクタ

がね

起き出せばすでに呼吸を始めてる 息が僕から逃げ出している
シャボン玉うかんでおちるそのうちにこわれてしまう透明なビル
アパートにバラボラアンテナあったんだみんなさびしがってて良かった
キシキシと鳴る自転車はわらってることなく苦しんでいる
銘柄で言われてすぐに番号が分かってからがコンビニ店員
点滴のリズムで雨が打っている ビルが光ってれば人がいる
次男だから二なんだねって 違うけど そうだよって 違うけど言う
ガラクタの前はテレビだったガラクタを手際よく回収してしまう

かたしかな

かうすまゐ

書き出しのうつくしさのまま眠りなさい Hi, my name is 春嵐
黙食はしげんにマナー監視へとつながっていく さいあくだこれ
茂みを抜けたら全てが見透かされている 手を握らせることは危険だ。
忘れられないくらい消したい記憶です Hello, キャンパス Hello, 隔絶
愛されてしまえばいいと思った日曜に目をしばたいたり
そうやって君は豊かになるんだね 僕はいつでも死ぬるコンパス
ありがとう 僕のすべてを知っているようにでなんにも知らないひとひ
ふたしかなデストロイ、ラブ 泳いでも泳がされても季節のはまだ

鳳の友

涸れ井戸

六連の蛍光灯の遅しき烏龍茶にもビタミンがある
山積みの未読冊子をメルカリに売ると云う友はつらつと言う
バルザック全集指して『五十代になったら読む』と言ってなかった？
移り気の激しい友は自嘲して笑う方針変わったのだと
景品でもらったらしい毛布借り仏間に泊まる寝心地が良い
鳳の未明いびきで目が覚めて昨夜残したルーベラを食む
学生のころとは違い将来の話をなにもせずに別れる
擦りガラス昔ながらの理容院横目に歩き鳳駅へ

低く飛ぶ燕の速さ 春という暴力に期待
してしまうのか

虫武 一俊

そうか、春は暴力なのだ。という痛烈な読後感である。
北国に住む私にとって、春は長く辛い冬からの解放
なのであったが、この「解放」という言葉がはらむ
匂いも、「解放」という語句を使う認識も、ひとつの
暴力のような気さえしてくる。初句からシャープな
語が連続して配置され、韻律も軽やかだ。それ故に
結句の自問が、よく響く。

一首評

西鎮

紫のカバの夢見た日の朝はケチャップ多
めのオムライス食む

ゆりこ

連作「陽射しを分けあって」八首。動物園に出かけ
たことを軽快に歌っていてどの歌も楽しい。動物は
笑わなくても手を振らなくても可愛い。存在自体が
たのしいのであるからと、作者が言っているかのよ
うに思える心地よい連作だった。引用したのは冒頭
の一首。紫と赤と黄、フルカラーディスプレイで見
たような夢。いったいこのカバの夢を見たのは動物
園に行く前だったのか、後だったのか？ 考えてい
るうちにほらもうこんなにも夕焼け。

一首評

雀來豆

淡雪を踏みて駱駝はゆつくりとじつに駱
駝はゆつくり沈む

宇祖田都子

テーマ詠「淡」。八十首の中で「淡雪」など雪を詠ん
だ歌は十首あった。そんな中、掲出歌は他に類を見
ない「淡雪」の歌である。まず、上句で淡雪と駱駝
という組合せの不自然さに惹かれる。また「駱駝は
ゆつくりと」と来れば「歩む」などの語を想起させ
るのが、下句でそれが裏切られる。第二句と第四
句で「駱駝」が出てくるが、これは駱駝の沈下を視
覚的にも表しているよう。いつの間にかこの空想的世
界観に沈んでしまった。

一首評

高橋良



一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

「知らんけど」言い添えるごとと繰りかえす航空障害灯の明滅

紅坂紫

第二句の「ごと」は、「ように」と「たびに」の二通り意味が取れるが、ここでは前者だろう。「いいんじゃない?（知らんけど）」「大丈夫だよ（知らんけど）」

会話のほんの僅かな隙間を縫うように、遠くの赤い灯の点滅が滑りこんでくる。自分ではそれなりに真面目に話しているのに、相手の返事がどことなく空疎に聞こえるのは、その「言い添え」のせいなのか。これを自問自答と読んでみても、また違った趣が見える。

一首評

中村成志

梅干しの種飛ばしあい抱きあった消えゆく無垢な惑星の上

鹿ヶ谷街庵

性愛の歌というのは、作者が女性なら冷酷なほど無機的描写に終始し、男性なら滑稽なほど自己愛とギミックに傾くべき、とそう思う（与謝野晶子を除く）。その意では、この連作はぎりぎり成功しているだろう。掲出歌は、「梅干しの種」という短歌的アイテムがなかなか気を利かしている。そこから「惑星」への展開などは、恋愛の些事と宇宙という、どこかつんく♪楽曲的スケール感の対比を感じさせ、魅力的な一首となった。

一首評

五十子尚夏

この空を辿っていけば昨日見た動画の中の戦場に着く

諏訪灯

連作「動揺」からの一首。未だ収束が見えない世界の現状への憂いが横たわる。基本的に空は平和を象徴するものなのに、今見ているこの空は、心に深く突き刺さってくる荒れた（または悲しい）画面の場所に繋がっている事実。こうすればこうなる、と淡々と詠んでいることが一層の悲壮感を醸し出して、読み手は揺さぶられる。揺さぶられて同時に、自分と同じような想いがそこにあることに小さく安堵するだろう。

一首評

杜野詩季

感想文とは魂に課せられた年貢と思う八月の末

月硝子

魂に課せられた年貢！面白くてかっこいい例え！結句の「八月の末」や連作タイトルから「感想文」は夏休みの課題かなあと想像しました。「年貢」は「年貢の納め時」みたいな意味合いも込められているそう。感想文を書くのは苦手なので、「魂に課せられた年貢」は分かるような気がします。感想を書くということとは、自分の魂の一部を他者に差し出すことなのかもしれないなあと思いました（これが僕の魂の一部です。お納めください）。

一首評

西淳子

青硝子大影たゆたふ白が降るしゃなりしゃるなる水生生物と

ナイアガラすすぎ

水族館での歌だろうか、ガラスの青と大きな魚影が目につかぶ。白が降るのは小魚か泡か。その曖昧さも青と対比されて鮮やかなシーンだろう。面白いのは、擬態語の「しゃなり」が活用したように続くことだ。また、「しゃるなる」のなるは、断定の助動詞とも取れ、「しゃなり」が「しゃる然とした」という意味に取れる。「しゃなり」が「しゃるなる」と活用するような泳ぎが想像できて、その言葉のユーモアが面白い歌であった。

一首評

大坪命樹

アンティーク

河岸景都

来客を拒んだ門をこじ開けて秘密を暴く、晴れているから私だけ写真を撮った場所があるみんなが逆を向いていた場所壁紙の模様が少し恐ろしいこんなに美味しい珈琲なのにアンティークチェアに座り深呼吸、沈み過ぎたらもう戻れない遠い国遠い時間の思い出を隠したままに売られるチェスト錆びついた足踏みミシン手放したその日を誰も覚えていない空気にも感触があるさらさらと捉えきれないこの店が好き何故だろう初めて立った場所なのにただいまと言いたいそうになるのは

それらすべてを抱いて眠ろう

菊池洋勝

希死念慮切れ味試す新甘藍それらすべてを抱いて眠ろう新人女優の気取らぬ抱き枕それらすべてを抱いて眠ろう新撰組を偲ぶ段だら羽織それらすべてを抱いて眠ろう新宝島の頁の興奮をそれらすべてを抱いて眠ろう新玉葱を刻む涙が干えるそれらすべてを抱いて眠ろう限定や新発売と付くものはそれらすべてを抱いて眠ろう昭和生れの手に新マンのソフビそれらすべてを抱いて眠ろう紙と洋墨の匂ひ嗅ぐ新連載それらすべてを抱いて眠ろう

存在のすべて

君村類

「ねえAlexa、音楽をかけて。祝福をして。存在のすべてを賭けて」ゆがんでもカーテンレールが導いたカーテンのとおり夜は明けていた終わり続けていたかった白昼のひなたへ出しておく金魚鉢撫でている床にざらつき いつかこの手はまた別の人間を抱くねえAlexa、ひとを過去形でいうときは ねえAlexa、聞かなかったこととしてそのKing Gnuの曲で泣いていたあなたを思い出して泣くだろう自分だけの秘密としての運び出す荷物の中にいないAlexaエンドロール それから先の出来事を誰も知らずに暮らしが続く

Le Temps Perdu

久助

靴音を吸い込む青いじゅうたんの搭乗口はもう空のなかバゲットを竹刀のように手に提げて信号を待つ巴里のおじさんポッキーが「ミカド」となりて接見す巴里のぎやまり・らふあいえつとシテ島の端の柳の木の下は恋人たちのVIP席なりマドレーヌ、ピラミッド、シャટેレで降りてシテ島の方角分らず町をさまよう朝まだきキックボードが走り去りあとは静かなバスキエ通り路地裏の菓子屋の時計永遠に三時をさせりムフタール街まだ巴里の夢を見ている サン＝ラザール駅で時計の留め具は外れ

結界の中で狂っていく人を見ている僕は正気だろうか
 王様になれるものならなりたいと思えるほうが出世はできた
 年を経るごとに悪人顔になるテレビに映る偉い人たち
 連日の会議会議で宮殿の時空はついに歪みはじめる
 頑丈で分厚い壁の内側で変異していく愛もあいつも
 現実ゲームのように変えられて王様を持つコントローラー
 いきり立つちんこ自慢とちんこ好き滅び切るまで飛び交うちんこ
 選ばれて鎖帷子を着た僕によく似合うよとみんな優しい

鬼灯の星

咲兵衛

ひと鉢を道しるべとして手に提げて鬼灯市より帰り続ける
 鬼灯の宇宙の樹形を見下ろせば瞬く星の花はさきがけ
 生まれる視点をそのもの鬼灯のてつぺんの星に流れ着くとき
 みづからを星に宿らせ身籠りて青き萼の帆綴ちてふくらむ
 しんがりを照らし続ける気概の朱 地より連なり色づいていく
 あの星は消失点でもあるのだらう地平の向かう際で輝く
 雑踏に消えゆく背中に仄あかく灯るひかりを見送つてゐる
 風待ちの下宿の窓辺に風鈴は澄んだ音色でカラランと鳴る

ふれ合えばどうなるだろう茹でたての卵のふちはうす緑いろ
 金曜の髪を解いていくようにパスタのテープを剥がすあなたは
 工場が白い煙を吐いている夜に息つき忘れるつがい
 しあわせはシンメトリーにやってくることはないけど幸せと書く
 暗闇に浸した瞳が鋭角の陽射しに染まる胸を映した
 フォークからこぼれてしまうパイକୁずを掬うやさしい手があつてなお
 何歳になっても慣れないわたくしのナイフがきみをだめにしてゆく
 長い長い砂地を歩く後悔とデッキシューズを友達として

汀線と上空の風

汐射ハルカ

けらけらと蛤わらう春なぎさ白い砂粒そらとの境
 ゆうやけは背中を見せて星もなく黒い夜空がビルを壊すよ
 石狩の幾つか丘を越え到る白い汀の望み来る浜
 心臓のかたちを模したケーキから思い伝わるきみの思いが
 木苺はぼくらの想いの集合体あかい果実のひとつ粒ごとに
 ふたりして壁にもたれるひとときは夢じゃないよね淡い痛みも
 先刻の夕焼け空は漆黒の月も翳りしきみのすがたは
 血潮打つぼくらの胸にしづき舞う虹も架かるね涯がない旅



真っ先にノートに記す君のイニシャル照れてすぐ消した書いた
 新人のマネキンすこし肌寒いようすで春の真似をしている
 おろしたて大学ノートの一行目 そこだけ美文字でいつも始まる
 新橋は霧が濃い町今日もまた課長が愚痴を延々と吐く
 あたらしいくつがぬれてもよごれてもねこのピートは陽気に歌う
 しんねんどしんねんどって姉ちゃんが言う口癖がうつるおとうと
 感情はつねに上書きされていきその野に生えるカラスノエンドウ
 新作の短歌浮かばず Chim → Pom のオブジェに心曝す気にいる
 空色の階段をステージに設へて天国から降りてくる新人
 新しい気持ちは波だ はしゃいでる黄色いカバーのランドセル行く
 新しい土はどうだ おいしいか ひとり暮らしはやってけそうか
 卒業をしたのに気になる新学期ざわさわ森からまだ出られない
 スライサーに新玉ねぎをすべらせてたのしき春の山姥となる
 新しき人の流れに耐えきれず眠れる葉をねだるも虚し
 まっさらなダイアリーの一行目 君の名刻む 溜息ともに
 自分だけ損するような関係はもういらぬや新しい靴

- ◆ 細川エリカ
- ◆ ほのかわり
- ◆ 真岡まな
- ◆ まさけ
- ◆ 御糸さち
- ◆ 衣未
- ◆ 虫武一俊
- ◆ 六浦筆の助
- ◆ 村田一広
- ◆ 杜野詩季
- ◆ 矢野目知桂
- ◆ ゆりこ
- ◆ 龍翔
- ◆ れいあむ
- ◆ Redvelvetake
- ◆ waka_na

テーマ詠「新」



まず祈る（触れても石に変わらぬように）新しい本をひらけば踊りだす文字
 ◆ 雀來豆
 終末の時計の針は零回り新世界へと僕らは進む
 ◆ 白石 夜花
 はなみずきはらりソファールにとろとろり 新月私はなにこともなく
 ◆ たえなかず
 わが同期新卒なれどわれよりも肝が据わりて愛想もよし
 ◆ 高橋良
 ゆっくりと新幹線へ乗り込んで私が私へ還りゆく旅
 ◆ 田中翠香
 新しくなった世界はこわくって日差しの色を窓越しに見る
 ◆ 千原こはぎ
 行く末を見定め難き三月に今年も薔薇の新芽が灯る
 ◆ 月硝子
 新生児室のコットのそれぞれに採れたばかりの白桃がある
 ◆ ともえ夕夏
 水を飲む きりんの首に八つ目の骨の動くを知らされてのち
 ◆ 中村成志
 新しい顔でふと見る涙目の古い顔 無視してアンキック
 ◆ 西淳子
 新しいパンプスの黒いエナメルのつま先に朝の光がとまる
 ◆ 薄荷。
 まぶしさの底を泳いだ新緑の影は波紋のようにゆらめく
 ◆ 早月くう
 初めての町へ行くのねタンポポは知らない人と新快速で
 ◆ 雛河麦
 新人がゆっくり焼いた餃子にも店の油の記憶含みぬ
 ◆ 廣珍堂
 新鮮さだけが魅力じゃないことを背中で語るドライフラワー
 ◆ 飛和
 新曲は新しい星 その日まで生き抜くための道しるべになる
 ◆ 福山桃歌

ハルシオン

塩谷風月

責了

西鎮

祝福を春に贈ろうヴィーナスの吐息のように芽吹いたあなた
 頑張らないことは淋しい雑踏の横断歩道で肩を押されて
 閉じた目に染みる日差しの温かさあの日あなたに言われた言葉
 ハルシオン春の紫苑と書いたならきれいな夢が訪れますか
 花の名を思い出せない指先で君のくちびる確かめながら
 excelでF2を押せば刻まれる傷口にただ「済」と打ちたり
 冷えきった空では星は瞬かぬ「あんなに硬いひかりはきらい」
 道を訊かれ指差せば遠く雲がゆくあの下の海を右に曲がって

猫を看取る春

嶋田さくらこ

また春だ花咲く春だもういない人をおもうのにちょうどいい
 季節がまた巡ってくるあの感じ、どうしようもなく花に焦がれて
 春なのにもうすぐ猫は死ぬだろう十九年は長いんだろう
 人生は悲しいことが多すぎて大人もやつぱりちゃんとできない
 「猫 火葬」で検索をする出張の火葬車があることに驚いて
 橋は虹色だっただろうかふつくとまだ柔らかい腹を撫でつつ
 ここにいて、どこにもいかないで、ねこよ、花降る春の光のなかに
 葉桜の並木を抜けた先のもう行かなくていい動物病院

雨がふる

雀來豆

もっとあかるい文体にするべきだった物語が終わらないのよ
 雨がふる猫の絵を描くのがうまいひろせあさは砂場に来ない
 春は朝。詩をそらんじて閉じ込める動画の中のふしあわせ犬
 メルカリで買ったブラレールの箱の掠れたやまねこころの名前
 相聞歌こころもとなくたちまちに形容詞から古ぼけてゆく
 ちよつと見せろよ誰かが言ってポケットの歌集は消える空はゆうやけ
 たとえば仮にと言ったあなたにラリー、モ、カーリーたちが手を振っている
 夏、平行四辺形に酔うバスケットゴールの黒い影がゆらめき

地続きの朝を迎えてコリコリと朝飯前にコーヒーを挽く
透明になりたい風で飛ぶほどの 予報は晴れの君の住む街
何もかもうまくいかない日もあって玄米なんか食ってられない
隠してた本音を言い出せないままに借りたノートに落書きをする
本当に会えるだろうか 瓶底は光を溜めてほのかに滾る
底のない空をトンビが飛んでいる私のいない街と知らずに
それでいい楽譜が風に散っていく何小節かは飛んでついでいい
流星はいつでも飛んでくるのだろう 祈りはきつとあなたに届く

矛盾期

たえなかず

緞帳が上がるライトがあてられるわたくし役の女優が躍る
痛みある心の端を捕らえられ乳腺外科をしずしずとゆく
返信をくれない人の携帯がつねに充電されていて春
太田光はひかりと読むと知らされて晩春^{おそはる}の闇にかすかなオーラ
覗いてはいけない、あなたがみつめる iPhone に広がる海の差出人を
忘却の彼方の冷雨 わがゆめにゆくダイヤモンドプリンセス号
水曜のペンを走らせわたくしは私のことしか考えません
白シャツ白い封筒白木蓮一瞬わたる陽にみえ無口

初夏の花物語

くちなしの白き香りに追憶の扉の向こうに立つ人のあり
海辺行く、菜の花畑に照らされて私のカバンが黄色にそまる
気丈夫な友のさいごの「さよなら」をまだ覚えてる 卯の花が咲く
あなたとのすれ違いさえできなくて夕焼けの橋は燃えているよう
灼熱のあなたの胸に飛び込むはボーチドエッグのような危うさ
牛ならば二つの胃の中スウィーツをつめこみ反芻する花月夜
初夏の朝きみに渡そう誓わずにミント色した忘れな草を
両の手を合わせて祈るマグノリア静かに開きはじめるこの朝

春の暁

高橋良

吹雪くなか高速道の上をゆく白鷺あれば緩むアクセル
夕時のホワイトアウト消防車の鳴らすサイレンの後に連なる
奥羽山脈横切るトンネル内をゆき雪のため起こる渋滞に入る
トンネルに響くサイレン出口なる事故の現場へ向かう救急車
病となり頻りにトイレへと向かう外の世界の光浴びつつ
生まれつき左腹部に痣があり前世は切腹したかと思ふ
反事実的な思考巡らせば中国留学するわれがをり
起きてすぐ抱かること求め来る幼子があり春の暁



新世界、向こうのほうにあるらしい 指に微風をまとわせながら
中途でも新入社員ネクタイの濃い紺色も緊張してる
真つ新たなキャンバスに置く絵筆へといつか誰かの視線が注ぐ
会員ナンバー四番新田恵利空で云へる吾ぽかんと見ゆる
間違いの証のようにひび割れた指でなぞった新茶のラベル
私はよき教師にはなれまいと泣きつつ摘まむバジルの新芽
8年で娘夫婦の仲の良さ嫡子無けれど輝き新た
新しい夜明けを待った雨だったそしてわたしは天使になるの
新しいカーナビと進む自分の道はどこへ向かって未来
金色をひいて火の鳥は飛んでいく火の粉を吞んで光に変へて
真新しいチョークの角が粉になり校舎の脇にユキヤナギ咲く
新しいレシピと言って納豆に蜂蜜掛ける 大人の飛躍
新たな渚を往けば遥かなる青空のもと吹けるさちかぜ
遠くから新入社員がやってきてバルカン人の挨拶をする
あざやけき朱のひと刷毛に新しきたくらみ兆すひと日のはじめ
はやぶさを追ってつばさがゆくホーム 北の空への滑走路めく

- ◆ かうすまあ
- ◆ 涸れ井戸
- ◆ 河岸景都
- ◆ 菊池洋勝
- ◆ 君村類
- ◆ 久助
- ◆ 響音
- ◆ 古都 梨衣子
- ◆ こののはもも。
- ◆ 咲兵衛
- ◆ 佐藤水魚
- ◆ 三月三日
- ◆ 汐射ハルカ
- ◆ 塩谷風月
- ◆ 紫苑
- ◆ 西鎮

「新」

テーマ詠

あたらしいあだ名がふえていくときの、少しわたしが薄まる感じ
新年度だからと変わる世に揉まれ励んでしまう私は弱い
乗るはずの新快速のベルが鳴る手をゆるめても残る指さき
玉ねぎと新玉ねぎは分けられて青果売り場のひかりのなかに
ブランコとチーター 真っ白な履歴書の麗しいホモ・サピエンス
四月一日その儚さをいうように新たに靴をおろすなどして
排水溝はいつも新たで パレットを拒否した画家はおしり打たれて
ニューソート自己啓発は避けられぬレナにはきつい農作業かな
六月の都会の風は新しいメルヘン野郎のシステム手帳
駅前のコンビニが新しくなり母の電話はまた長くなる
新しいシャツ新しい靴力バン新しくない私青空
視覚には新しい角むらさきのハレーションなど表面のつや
天才の頭の中に迷いこむような新宿駅地下通路
新しい朝より古い朝が来てほしいひとりっきりの寝室

- ◆ あき子
- ◆ 麻倉ゆえ
- ◆ 雨虎俊寛
- ◆ 有村桔梗
- ◆ 歩歩
- ◆ 五十子尚夏
- ◆ 池田竜男
- ◆ 石川順一
- ◆ 宇祖田都子
- ◆ 泳二
- ◆ Ls
- ◆ 岡田濫
- ◆ 音平まど
- ◆ がね

春はあけぼの

田中翠香

篠の目に朝日差し込み大臣の屋敷の朝がまた始まって
宮仕える間にも暇がありぬばたまの墨をふくんで筆はふくらむ
清原の、少納言様の……娘さま 今日も名前でも誰も呼ばない
中宮が天皇がいて大臣が私も同じ時代を生きる
書いてやる私はいまを生きている中宮定子様と一緒に
なにひとつ思い浮かばず夜は開けて山の端から光がここへ
決まった「春はあけぼの」これでいい私の想いを綴っていいこう
また今日も始まってゆく宮仕え世界はなべて輝いている

遅い春

千原こはぎ

お隣にもらった三つ葉をたっぷり茹でてナムルをつくる 正しい
寝てる猫また寝てる猫また寝てる猫 春眠かやつぱり老いか
世界から取り残されたこの部屋の小窓にとどく春を吸いこむ
洗濯物外に干したくなる午後のこれが春ってことなんだろう
夢にきみがでてこなくても春だから世界はたぶんちゃんとやさしい
聞きたくない見たくないことばかりあるまずは朝ごはんを食べないと
わたしだけ止まったままだ三度目の春はわらって夏へと駆ける
次に会う日は夏か秋、冬か春 見えない未来ならもう見ない

十五時の西日

月硝子

飛ばし読みされる保健の教科書にヒトの受精はひっそり進む
原色にまみれた菓子で舌を染めすくすく育っていた昭和の子
十五時の西日を溜めた駄菓子屋の瓶のスルメがそっと身じろぐ
人絶えたシャッター街に有線は今日も数え唄をかけ流す
幾たびも夢に訪なう街角にまだ揺れている氷屋の旗
昼の月みたいな歌の感傷を背に校門を送り出される
卒業後ひとり覚えている顔は学級文庫の心靈写真
言い訳や酢豚のパイナップルや先に逝く家族を許し大人一枚

くろわさん、高校生になる

ともえ夕夏

春は来ぬきみを抱へし麗らかな日の掲示板しろくかかやく
あれこんな翼が生えてあたのかね膨らむクロワッサンのかろやか
制服に真青のリボン点したる子らの背筋のぴんと伸びをり
自転車に跨がれば風こんなにも「いってきます」が晴れやかである
ちさき背のおほき鞆に空つぽの弁当箱がかちやかちやと鳴く
「演劇部にしようと思う」嗚呼きみも母の沈みし沼を見つけて
新しき友達すぐに作りたり素顔のわからぬプリクラ一枚
好きなひとのひとりも連れて来なさいな母はその日を待つてをります

姫へと杯を

中村成志

子曰く脚は腿より振り上げよ早ばや春となる畦道を
来るときは来る春があり人がいて白木蓮は開きが過ぎて
南関東午後より日射しコノハナノサクヤヒメへと杯差し上ぐる
ひこばえの桜ばかりを見て歩くかつてここには堤があつた
ひらけゴマ開け月輪天上にハナミズキいま大きな背伸び
純白は緑に沁みるものなれば視界を覆う大島桜
いま靴は重いでしょね紅白のつつじそれぞれ雨を溜めゆく
今日からは暑さと呼ぼう朝の陽のソメイヨシノの深緑眩し

これは誰かの28歳

西淳子

CDの光で好きな音楽をカラスたちにも教えたくなる
ストローをつけますかつて聞いてくれ俺がレトルトカレー買うとき
再結成されたバンドのドラムだけ集めて、笹井宏之ごっこ
かき氷の溶けたぬるいを飲み込んで、夏の終わりはこういう味だ
ピーマンの皮肉詰めとか大目玉焼きとかを食う泣きながら食う
神様に祈りをささげるように待つ三分間です ラーメン
マフラ―は冬の散歩紐。うれしくって犬みたいに白い息を吐く
ジュンク堂でキスをしている人がいて初谷むいのファンだとおもう

上野にて

うま

ひとり身でさみしいだらう？と胸をもむ隠語ばかりの腐れ縁なり
女の子が好きならきつと切りすぎたおまへの爪は目に入らない
虹色に灯るひかりはあきらめて魚のやうに口を動かす
本当はうつすら気づいてゐるくせに ジョッキの底にはき出す思ひ
池に沿ひひとしく春を待つ鳥よおれは上手に距離を置けない
女の子とは切れさうな右の手の生命線について話した
眠れないときも眠らなきやならないカプセルの外聞こえる寝息
上野とふあかるい夜の向かうから塔は見下ろし喜劇をわらふ

第三の目／テセウスの船

龍翔

まばたきをひとつふたつとするやうに白木蓮のひらいてゆけり
第三の目をさがすときひとびとは誰しもいちどへそをとほりぬ
水滴が茎をつたつてゆくやうにあなたの汗がつつたふ脇腹
血液のつめたく巡る春の夜の花瓶の水に砂糖を溶かす
はなびらが目に見ゆる日はあまたなる目が水面を流れてゆきぬ
切り花はまだ生きてゐるわたくしも往生際の悪く生きたし
どこまでが頭かわからなくなりて首のうしろに櫛の歯を当つ
細胞の生まれてはまた死んでゆくわたくしといふテセウスの船

海へいこうか

ネコノカナエ

川沿いをずんずんゆけばもしかして海なんじゃない 行こうか週末
まだ海に触られていないつま先が海を指すんだペダルを漕いで
川沿いをずんずんゆけばゆきどまりそれでもあつちが海だとわかる
山なみのほどけて空が流れ込むあつちが海だあつちが海だ
海までは入り組んだ道関係者以外立入禁止の何か
鼻先を海がさらってすこしだけ海にほどかれちゃってもいいかい
浜辺には少し遠くてつま先はまだしばらくは波に会えない
浜辺には少し遠くて海の香を嗅ぎにゆうぐれ港へむかう

夜は青色

薄荷。

この街のブルーな夜に馴染むように暗青色のスカートをはく
時々車が通って時々散歩の犬が行く住宅街
青色に時間は流れてそれぞれの窓辺に降りるそれぞれの夜
あなたじゃない誰かが誰かを呼ぶ声が響いてひとりぼっちの公園
たどたどしい十八歳のブルースのまだ諦めのつかない夜だ
この夜を漂白している看板灯（道路向こうのドラッグストアの）
波音のリズムで道路をぬらしている海のない街の点滅信号
言いかけた言葉を幾つも飲みこんでこの街の夜は何処までも青

亡き祖父へ捧ぐミルクキャラメル

れいあむ

花埋み冷たく閉じたくちびるに末期の雫のコカ・コーラ
とどかない語尾まちがいの流行り歌窓の外には春がほころぶ
担い手の背さえも丸く頼りなく揺れる棺が空へ旅立つ
箸先でからりとまるぶ骨の音に白百合の茎の緑が滲む
あなたなら笑ってくれると信じてる位牌がわりのチョコレート
豆蔕の枯れゆく松の盆栽に水遣りをする影ひとつなく
主人なき荒れた庭にも芽吹く夏お隣さんの藤の棚
繰り返し願うほどに遠ざかる雲の峰からのち降る降る

広い空

和田晴美

猫おじさんが猫の寝床をととのえて猫待っている葉桜の下
成れの果てと云うのだろうかこの辺り誰もが顔をなくし行き交う
妹に会ったび確かめ合っている母は最後に何か飲み込んだと
子が夢で花吹雪に変化していく生き延びるよと言わせたばかりに
吐きながら食わなくても良いもう良いよ更地から見上げれば広い空
ふっさりと八重桜に胸ふさがれて眠れない闇に居るゆえ春は
いつ如何なる時にも如何なる旗の下にも集う事はしないと誓う
故郷にも否どこにでもコメダあり餡トーストをいつも選べる

陽だまり遠く

杜野詩季

食欲と飲み込めぬことのせめぎ合い饅頭食べたい食べたいと泣く
濃密な時間をつかむ父の手を握ればベッドの下をゆく風
弟が初めて寺へ妹はお菓子わたしは花係となる
新聞がずっと友だち膝つめて話したかった欧州のことを
仲良しに見えなかったひと組の片方がただ涙にくれる
「女には学問要らぬと言われたよ」「じいちゃん、まじ？」と仰け反る娘
それぞれが愛されたけど一番の歳上私はその分長く
「朝顔が大好きでした」と強面の庭師が語る陽だまりの父

知らないでしょう

ユーリ

画面には映らぬ癖を知りたいしそれは誰にも教えたくない
一時でも同じ視界を持ちたくて送るゴッホの春の絵葉書
ひとりふたり家路を急ぐ夕方に君が帰る場所がここなら
壁一枚隔てた距離で思い知る有象無象の我と君では
とりあえず同じ空気が吸ったけどその他大勢も同じ空気
君の手に渡せなかった旋律がかばんの奥で糸と絡まる
顔洗い泣けてくるのは張り切ったメイクが成仏できずにいるから
満開の煌めく桜月夜より焼き付けたかったせめて影でも

ちがうらしい

葉村直

中学の指定ソックスそのままに運び込まれた病室がきれい
怒られるより叱られることばかり 見舞いの姉の息は乱れて
昔から病弱だねと苦笑する口のほくろをずっと見ていた
姉さんと呼べないときがたまにある「ねえ」でとどめて飲み込んだ「さん」
点滴とポカリは同じ成分でわたしと姉の血はちがうらしい
六月のプラスバンドの大会を母さんはたぶん見に来ないだろう
ため息とくちびるとひそめた眉とわたしの髪をなでる右手と
またくるね、の「また」が机に光ってた 高いゼリーと二つのスプーン

永い夕暮れ

早月くう

みずうみに沿って歩けばいつの日か海へと還る、そんな約束
現在を過去へ調律するように朝、透明な音叉をたたく
木漏れ日の円を数えてやわらかなひかりは距離の表れだった
はつなつの満ちる加速度 また日々はいのちのほうへ傾いてゆく
窓際で氷の溶ける音だけを聴く、しずけさの色はみずいろ
白夜とは永い夕暮れねむれないことも正しく許されながら
掴むほどこぼれ落ちゆく砂粒を銀河のように手放している
待っていて、たった数十年分のひかりをためて会いにいくから

春の色

ゆや ゆき

四月ってこんなに寒いものだっけ我慢出来ずにストーブを焚く
綻んだ蕾は固く足踏みし桜を長く楽しめそうな
桜より早くに開く紫のヤシオツツジは寒さに震え
天然の芳香剤はヒヤシンス強風に折れ傷付きながらも
見覚えのない水仙が咲いている春の色だと訴えながら
ニュースでは満開の報この辺でぼつりぼつりとピンクを探す
はしゃぐ犬葉っぱをひげに付けながら誰より春を吸い込んでいる
生命の強さを思うムスカリも、梅も桜も一斉に咲く

冬の鎧

ゆりこ

階段を駆け降りてゆく蜘蛛の巣が張られた手すりに気づかないまま
すぐに手を洗えばよかったけど夏の影がだんだん濃くなって、無理
剥きすぎた唇に滲みる後悔の膿を何度も味わっている
蓋のない排水溝に流すのは秋雨でなく明日の私
長くなる影が優しい診察の予約はいつもの午後2時にする
少しずつ冬の鎧を脱ぐために眠り貯金を続ける風鈴
君らしく生きてほしいな、丸い背と新月の空を見送っている
新しい手帳を選ぶプリキュアが再開された春はうれしい

パラオと七つの子

ヒブノ寿司マイク

昨日からかわいい七つの子を残し母さん燕が帰ってこない
父さんのワンオペ育児狩り給餌雛の保温にキリキリ舞いだ
一羽減り二羽減り車庫の軒下の巣のなか眠る骸が七羽
七つの子 燕ツバメの国へと旅立って十三時半に吹くぬるい風
父さんはひとり南に帰るのかパラオで妻子を懐かしむのか
車庫を出て彼方へ高い声で鳴き 見えなくなった見えなくなった
夕方に二羽の燕が飛んできてこれはたまげたスピード婚だ
父さんと新妻せつせと巣を直す命短し恋せよツバメ

Sunny Side

廣珍堂

街角に少女の弾けるインヴェンション左手歌ひ左利きかも
保育園帰りのバスを待つてある母親の手が持つチロルチョコ
川あれば花は盛りの喧騒をすでに流して誰ぞとめなん
屋飯の町屋の店を出でたれば背広の袖の重たかりけり
今日もまた保育園児のお散歩が信号を待つ御苑の角に
人工の日向と土の街に住み定年の日に見る空の青
女生徒が校門前で騒ぎつつ今日もスイーツ攻略に行く
学ランの前をはだけた生徒らは汗の匂ひの狭き電停

はりぼての喜劇をきみと

福山桃歌

雷鳴が暗い東の空を駆けめぐる 今日から家族のぼくら
西日には黄昏の赤 夕暮れは歪んで見える箱庭の夢
はりぼてを抱きしめ深く眠るときこを愛しく思ってしまう
守るため伸ばした腕の白くありいばらの花のうつくしきこと
禁断の林檎が落ちる にんげんのつみはあまくてやわらかいもの
どちらから昇るとしても太陽は世界にしばらくひかりとなつて
ピスタチオ、アーモンド、ピーナッツ まだ知らない味を探す街角
生きるため乗り越えるべき任務^{ミッション}はわたしを導く八つ^{スラウ}の星

どこにもない暮うし

ほのふわり

いつもより七分早く目が覚める 七分かけてわたしに戻る
明け方に見た夢のこと でも夢は思い出さない方が夢だよ
まだ空を知らない鳩が時計から一時間に一度だけ出てくる
スカートをかう スカートはどうしても風のかたちを覚えられない
懸命に領いていてあのひとはきつと発電してるのでしょ
う
ばらばらにほどこいたしめじ この手からうまれてしまう孤独のはなし
ポケットに入れっぱなしの悔いがありいつもより暴れる洗濯機
雲丹色と言われてからは雲丹にしか見えない布団 ちょっとうれしい

西瓜五

虫武一俊

満開の桜に意味を与えてた昨年までのおれの傲慢
嘘をつく瞬間ひとは目をそらす道端に花を見つけるように
仲違いするふたりからそれぞれに受け取っている愚痴とコーヒー
資格のために高校物理をやり直す今日の摩擦も電気にならんか
受け容れていけるだろうか知っていることの少ない自分自身を
電子決済できる自販機まで五分 足りないところは自分が埋める
氷山が二〇年かけて大海へ崩れゆくのを見つめるツアー
おれのへその話のときに率直を見せるあなたも持っているへそ

桜・サクラ・さくら

六浦筆の助

花筏となるように散れ「うたの日」のどんまい取りしあまたなる短歌
桜舞ふ小袖に若草色の帯、和菓子のやうな君に逢ふ夢
清経の笛の音聞けば夜桜は闇に散りゆく平家の小舟
夕暮れに八重の桜か燃えており 夜の地震を知るかのように
写メだけで通りすぎてく花見にはついてゆけない「かつば黄桜」
人もなき上野の山の日暮れ道 花雪洞は鎮魂のごと
木村屋の桜漬載るあんパンと銀ブラをした三十の我
桜湯にまだ縁はなく 接種してやつと葉桜デートが実る

1972くけぶる団地

まさけ

勤め場の微粒子けぶる踊り場でひとり静かに眺む朝焼け
隣人もまた隣人も隣人もけぶりに包む鉄の工場
妻たちがけぶらす噂おそらくは口裂け女もここが初出か
昼下り並ぶ団地の一室で淫靡にけぶる白いカーテン
味噌汁と喧騒で湧く白壁を淡くけぶらす帰路の夕焼け
爺さんの龍角散と児をはたくシッカロールがけぶるお茶の間
母さんがけぶるテレビを2度叩きさらに輝くジュリーの笑顔
文化的圧迫感がある窓にけぶって映る私っぽい月

動物園日和

御糸さち

一軒家建てる如くに悩み抜きついにひとつのおやつを選ぶ子
子供には「ひとつだけね」と言いながら親はおやつをみつ購^{あがな}う
子供にも事情あるらし東武線にアタリの車両ハズレの車両
動物園日和だねえとどこから聞こえてくれば子はうなずいて
ガチョウは日かげヘカビバラは陽だまりへ 光に對し態度それぞれ
ヘビのケースに【調整中】の貼り紙があつて調整されているヘビ
アボリジニ一家三人カンガルーひろばのすみの団欒や良し
リスを見てフクロウを見て「チタタブ」とつぶやく友の瞳、黄金

春の力学

六厥めれう

今すぐにこの紙パックを捨てたくて表面張力いっぱい注ぐ
一日にほんの一瞥くれるなら柱時計の真似だつてする
笑うから溢れてしまう鎖骨とは水を湛えておけぬみずうみ
砂嵐うまく説明できなくてアナログテレビの動画を捜す
戦場も搜索現場の中継も既読のつかぬ世界から見ると
ただ単に春の嵐でいいじゃないメイス टीमは和製英語だ
呼び鈴が鳴るより一瞬だけ早く人が来たよと知らせしてくれる
ドアノブを右へ回せば左へと回る世界はすぐそこにある

蒼いメール

村田一広

アップルパイ湯気をたててる真つ赤な容器の真つ赤な皮をむいたら
生々しい蒼空がメールで届く浮き出す白い雲の断片
ポテトチップスフライドポテト食べながら(アクリルアミド)七文字うかぶ
僕の螺子ぢやないよね近頃足元にしばしばこぼれ落ちてゐるけど
駐車場の札を立てれば車来なくなつても駐車場であられる
(見終はつたらまた海に戻してね)手のなかのアンモナイトの化石
手首の線と平行にして幾本も肘までリストカットが続く
洗濯機買ったけれども洗ふもの何もないのよ野良猫家族